

スポーツを「みること」を通じた体験活動が、 児童のスポーツとの多様な関わり方に及ぼす影響

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 沼倉しおり

1.研究背景及び先行研究

1-1.研究背景

文部科学省（2019）は、小学校体育科の目標として、体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを掲げている。ここにおける、体育の見方・考え方とは、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、自己の適性等に応じた多様な関わり方と関連付けることであると考えられており、することだけでなく、みること、支えること、知ることなど、自己の適性等に応じて、運動やスポーツとの多様な関わり方について考えることを意図している（文部科学省，2019）。また、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成するための学習過程を通して、生涯にわたって運動やスポーツを日常生活の中に積極的に取り入れ、生活の重要な一部とすることを目指しているものである（文部科学省，2019）。さらに、運動やスポーツとの多様な関わり方ができるようにするために、運動やスポーツについての興味や関心を高め、技能の指導に偏ることなく、する、みる、支えるに知るを加え、資質・能力をバランスよく育むことができる学習過程を工夫し、充実を図ることが大切である（文部科学省，2019）。中学校体育分野では、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成するため、運動やスポーツの多様性、運動やスポーツの意義や効果と学び方や安全な行い方、文化としてのスポーツの意義（文部科学省，2019）という3つを中心に体育理論の内容が構成されている。しかし、小学校では同様の内容が学習内容に含まれておらず、授業では取り扱うことがない。

そこで、本研究では、体験活動に着目した。体験活動とは、自分の身体を通して実地に経験する活動のことであり、子どもたちが身体全体で対象に働きかけ、かかわっていく活動のことである（文部科学省，online）。この中には、対象となる実物に実際に関わっていく直接体験、インターネットやテレビ等を介して感覚的に学びとる間接体験、シミュレーションや模型等を通じて模擬的に学ぶ擬似体験がある（文部科学省，online）。文部科学省（online）は、間接体験や擬似体験の機会が圧倒的に多くなった現在、子どもたちの成長にとって負の影響を及ぼしていることが懸念されており、ヒト・モノや実社会に実際に触れ、かかわり合う直接体験が、今後の教育において重視されなければならないとしている。その為、本研究では、実際に試合会場へ足を運び、スポーツの試合を観戦する直接体験を実施した。

1-2.先行研究

1-2-1.スポーツとの関わり方について

笹川スポーツ財団（2019）が実施した全国調査である「10代のスポーツライフに関する調査」をもとに、青少年のする・みる・ささえる活動の実態について二次分析した結果（武長，online）、3つの活動のいずれも行っている青少年は全体の10.3%であった。一方、しない・みない・ささえないという全くスポーツに関わっていない者も10.4%存在し、10代の人口から推計すると123万人にのぼることが明らかになった。さらに細かく分類すると、「するのみ」タイプが42.5%、「する・みる」タイプが29.5%と、「する」と「する・みる」というスポーツ行動が全体の7割を占め、10代のスポーツライフはスポーツ

を「する」行動を中心に、それに「みる」行動が加わる構造となった（武長，online）。また、「ささえる」に着目すると、「ささえるのみ」タイプは0.3%であり、「する・ささえる」タイプは4.4%、「みる・ささえる」タイプは0.1%であった（武長，online）。さらに、運動・スポーツの好き嫌いとの関係を見ると、「するのみ」タイプでは「好き」と回答した者は47.3%と半数にも満たないが、「する・みる・ささえる」タイプでは8割が「好き」と回答し、するだけでなく、みる・ささえるという活動も行っている10代の方がより運動・スポーツを好きと感じているという結果になった（武長，online）。その一方で、「しない・みない・ささえない」タイプは6割近くが嫌い（どちらかというときらい・きらい）と回答していた（武長，online）。例えば、運動・スポーツが好きだから多様な関わり方をしている、嫌いだから関わらない、多様な関わり方を通して好きになった、スポーツをみたことやささえる経験をしたことがないから嫌いというように、好き嫌いとスポーツ活動のどちらが先行して行動がされているかは明らかではない。しかし、多様な関わり方を経験することで自分に合った運動やスポーツとの関わり方を見つけることができれば、運動やスポーツが好きになる可能性は高まると考えられる。また、「スポーツにはいろんな楽しみ方があり、スポーツは苦手だけど少年団や地域のクラブなどの運営をささえる活動でスポーツと関わりたい、という子がいてもよい。ささえる活動（スポーツボランティア）を行った10代の多くは楽しさを感じ、また人の役に立っていることや人々との出会いを喜びとして感じていた」（武長，online）というように、豊かなスポーツライフの実現には、スポーツとの多様な関わり方を実際に体験する中で、自分の適性等に合ったものを見つけることが重要なのではないかと考える。

1-2-2.体験活動について

実際に、東京都の取り組みとして、2021年に開催された東京オリンピックおよびパラリンピックにおける競技観戦が行われた。東京都教育委員会が、平成28年度から東京オリンピック・パラリンピック教育を実施しており、その一環として、希望する都内公立学校に東京2020大会の競技観戦機会を提供し、東京で開催される大会を直接観戦する体験を通じて、子供たち一人一人に、人生の糧となる掛け替えないレガシーを残していく（東京都教育委員会，online）という目的のもと行われた。参加した生徒からは、「テレビで見たときより、様々な音が聞こえたり、スピードの速さを実感できたり、カメラに映っていない選手のプレーが見られたりと、生で観戦することのすごさ、楽しさを知ることができました。」や、「コーチやボランティアの方々などが選手を支えている姿を見て、支え合うことの大切さを感じました。」、「会場のボランティア、関係者の方、実況の方、皆さんが私たちを歓迎してくださってとても嬉しかったです。」といった感想があったことを報告している（東京都教育委員会，online）。さらに、文部科学省（online）は、「小学校の時に体験活動などをよくしていると、家庭の環境に関わらず、その後の成長に良い影響が見られる」ことを報告している。このように、学童期における体験活動が子どもの成長に良い影響をもたらすことが明らかになっている。

しかし、国立青少年教育振興機構（2024）が行った、青少年が希望する体験活動を行うことができているかについて検討した青少年の体験活動等に関する意識調査の結果、保護者が小学生の子供にしてほしいことや中学生と高校生がしたいことよりも、したことの割合が少なく、希望するほどの体験ができていないということが明らかになった。実際、家庭の状況や地域の状況等により、体験活動の機会には差が生じており、体験格差という言葉で語られている。以上のことから、学校教育において体験活動の充実を図っていくことが重要視されるべきであると考えられる。

2.研究概要

本研究の調査対象は、サッカースクールに通う小学5年生7名、6年生4名の計11名である。本研究では、事前アンケート調査、バスケットボール女子日本リーグ（通称:Wリーグ）に所属する、山梨クイ

ーンビーズ（以下、山梨 QB）の練習見学、試合観戦及びインタビュー調査を行った。サッカー競技者を調査対象としている為、サッカー競技のみに目を向ける可能性が高いのではないかという理由から、バスケットボールを選択した。また、本研究におけるみることについては、笹川スポーツ財団（online）の調査で用いられたスタジアムや体育館などの競技会場で直接スポーツを観戦した者を基にしている。

2-1.目的

本研究では、スポーツを「みること」を通じた体験活動が、児童のスポーツとの多様な関わり方に及ぼす影響を調査することで、その有効性を検討することを目的とする。

2-2.事前アンケート

本研究では、Google フォームを用いた事前アンケートを行った。質問項目は以下の通りに設定した（図 1）。「普段、スポーツをみることがありますか？」という質問は選択式とし、その他の質問は自由記述式で回答を求めた。また、調査対象児童と共に保護者が回答を行うよう依頼をした。

- ①お名前を教えてください。
 - ②普段、スポーツをみることがありますか？
観戦時間や手段、プロスポーツ・アマチュアスポーツは問いません。
〔よくある・たまにある・あまりない・ない〕
 - ③その理由を教えてください。（よくある・たまにあると回答した場合）
 - ③-（1）どのような手段でスポーツをみましたか？
テレビ中継・現地観戦・動画配信サービス（YouTube/DAZN/ABEMA など）といった、スポーツをみた方法を教えてください。
 - ④その理由を教えてください。（あまりない・ないと回答した場合）
 - ⑤運動やスポーツが上達するには、どのような取り組みが必要だと思いますか？（複数回答可）現在、取り組んでいるスポーツに限らず、運動やスポーツが上達するために、あなたが必要だと考える取り組みを教えてください。

図 1. 事前アンケート質問項目

2-3.練習見学

県内の施設で行われた練習見学を 11 月下旬に実施した。調査対象者には、事前に質問準備シート（図 2）を配布し、選手や指導者、その他の関係者に聞いてみたいこと及び疑問に思っていること記入してもらった。練習の様子を見学した後、選手がシューティング練習を行っている際、事前に記入した質問準備シートを基に調査対象児童がヘッドコーチにインタビューを行った。さらに、選手にも同様にインタビューを行い、フリースローやドリブルといったバスケットボール体験を行った。

2-4.試合観戦、事後アンケート及びインタビュー調査

12 月上旬に、山梨 QB のホーム戦の試合観戦を実施した。試合観戦後には、別室に移動し、試合観戦レポートという形で事後アンケート（図 3）を実施した。質問項目は、山梨 QB の練習見学や試合観戦を通じた感想について、事前アンケート項目と同様の運動やスポーツが上達するための取り組みについて、体験を通して生まれた疑問についての 3 項目を設定した。さらに、事後アンケート回答後に、インタビュー調査を実施した。インタビューは、A グループ（6 名）と B グループ（5 名）に分かれ、筆者と大学 3 年生 1 名が調査を行った。グループに分けについては、山梨 QB の練習見学に参加した者と参加

できなかった者という観点と、事前インタビュー調査の「普段、スポーツを見ることがありますか」に対する回答の2つの観点を基に決定した。筆者と大学生は共に、調査対象児童が通うサッカースクールのコーチという立場にある。筆者がインタビューを行ったAグループは6名それぞれに異なった質問項目を設定し、半構造化インタビュー形式で行った。また、Bグループは同一の質問項目を設定した半構造化インタビュー形式で行った。

図2. 質問準備シート

図3. 事後アンケート

3.結果及び考察

本研究では、調査の対象者が11名であるため全体比較は行わず、体験活動前後での個別の変化を結果として示していく。本報告書には、筆者がインタビューを行ったAグループの6名の結果を記載する。さらに、表(1、2、3、4、5、6、7)に事前アンケート(図1)の回答を示す。

3-1.結果

3-1-1.対象者A(山梨QB練習見学参加者)

運動やスポーツが上達するための取り組みについて、事前アンケートでは「練習あるのみ」と回答し、体験活動後の事後アンケートでは、「個人でやるスポーツだと自主練などが大切だけどチームでやるスポーツは、もちろん自主練も大事だけど他にも協力などが大切だとこの試合や練習を見て思いました。」と記述した。インタビュー調査では、試合で面白かったことについて、「色々言っていたり、この子にパスしなとか、指をさしたり、今日はそういう場面があった。」「試合中に喋っている声は聞こえないけど、結構、動作でやってた。」という発言があった。練習することの大切に加え、バスケットボールというチームスポーツをみたことによって、協力の大切さや面白さという視点がうまれた。

②	たまにある
③	野球に少し興味があるから
③-(1)	テレビ中継
⑤	練習あるのみ

表1. 対象者A事前アンケート

3-1-2.対象者 B（山梨 QB 練習見学参加者）

体験活動を通じた感想として、「練習見学では選手がどうしてバスケットを始めたのかなど、インタビューに答えてくれて夢へ 1 歩ふみ出すことができました。」と事後アンケートに記述した。試合観戦後のインタビュー調査では、以下のような発言があった。

筆者：（練習見学の時に）選手にインタビューをしに行った？

B：行った。

筆者：なにか聞いた？

B：バスケットをはじめた理由とか。

筆者：なんて言っていた？

B：身長が高いから。遊び感覚ではじめたらいつのまにかなっていたみたいなの。

筆者：B は遊び感覚でやっていたらサッカー選手になれそう？

B：いや、ちょっと努力しないと。

また、運動やスポーツが上達するための取り組みについては、「練習をしっかりとやって、本番でも一生けん命にやる。」と事後アンケートに記述した。事前アンケートと記述内容に大きな変化は得られなかったものの、取り組みの姿勢に対する言葉が加わった。

②	よくある
③	面白いから
③－(1)	現地観戦、テレビ中継
⑤	毎日練習をする。目標を決める

表 2. 対象者 B 事前アンケート

3-1-3.対象者 C（山梨 QB 練習見学参加者）

運動やスポーツが上達するための取り組みについて、事後アンケートには、「（練習見学の時に）〇〇選手が「毎日の積みかさね」と言っていて、とても感心しました。サッカーだったら、毎日ボールにふれたり走る練習をたくさんすると上達するのでは、と思います。」と記述した。また、インタビュー調査の中では、

筆者：事前アンケートでよく寝る、よく食べると回答したけれど、練習見学の時に選手に聞いた？

C：どうやったら上手くなれますか。みたいなのは聞いた。

筆者：どういう答えが返ってきた？

C：毎日コツコツすればできるって言った。

筆者：それを聞いてどう思った？

C：例えばサッカーだったら、毎日ボールに触れたらいいんじゃないかなって思った。

と、発言した。このように、選手との関わりの中で新たな運動やスポーツへの取り組み方を得ていた。さらに、運動やスポーツに取り組む雰囲気について、以下のような発言をしており、失敗を責めず、選手同士で励まし合っていた様子が印象に残っていた。

筆者：練習見学で思い出に残っていることはある？

C：選手たちが試合してて、ミスしても責めてなかった。

筆者：すごく良い雰囲気で練習していたよね。

C：サッカーしてるときにミスしたら、あーってなるから。

筆者：みんなにどうしてほしい？

C：大丈夫だよって言ってほしい。

筆者：試合の感想をきいてもいい？

C：みんなで頑張ってて、責めてなくて、最後負けちゃったけど、前半めっちゃ攻めていた。

②	あまりない
④	スポーツをしている方が好きだから
⑤	よく寝る、よく食べる

表 3. 対象者 C 事前アンケート

3-1-4.対象者 D（山梨 QB 練習見学参加者）

体験活動を通じた感想として、事後アンケートに、「テレビで見るのとはちがいとでもはくりよくがあった。」と試合会場の雰囲気を感じたような記述があった。また、「選手たちだけではなく、応援をしていた人達もすごく熱がこもっていてすごかった。」と試合の様子だけでなく、応援についての雰囲気も感じたような記述をした。さらに、「練習を見に行ったときは、試合にどのような人が関わっているかわからなかったけど、試合をみたら色々な人が関わっていることが分かった。」と記述した。練習見学だけでなく、試合会場に足を運んで試合観戦をしたことによって、試合に関わっている人の存在を認識した。

事前アンケートで回答したスポーツをあまりみない理由について、インタビュー調査で尋ねたところ、以下のような発言を得た。

筆者：今日観戦してみて興味はわいた？

D：わいた、わいた、だいぶわいた。

筆者：どんなところにそれを感じた？なんで興味がわいたの？

D：練習を見たとき正直あんまりちょっとつまらないなとか思ってたけど、試合で見たらなんか、コーチがああしろこうしろって言ってるのとか面白かった。

このように、試合観戦を通して興味がわくようになったという変化がみられた。

しかし、運動やスポーツが上達するための取り組みについては、「毎日ちょっとずつの練習を継続することが大事だと思った。」と記述した。事前アンケートの回答と本質的な変化は得られなかった。それでも、インタビュー調査の中で、「バスケの練習を見に行ったときに、ゴールの体験（シュート体験）をしたけど、全然入らなかったけど、（山梨 QB の）バスケの選手たちはほとんど全部入ってて、そこらへんは、やっぱ練習してるからかなって。」と、練習見学でみた選手の様子から練習の重要性について感じているような発言をした。

②	あまりない
④	スポーツするのは好きだけど、観戦にはあまり興味がない
⑤	続けること、楽しくスポーツすること、色々なスポーツに挑戦すること

表 4. 対象者 D 事前アンケート

3-1-5.対象者 E（山梨 QB 練習見学不参加者）

試合の感想について、事後アンケートに「試合でよくファールがでていたけど、なにがファールなのかよく分からなかったです。」と記述した。さらに、インタビュー調査でも、

筆者：今日の感想を教えて。

E：今日は相手チームとかクィーンビーズでファールみたいなのが多かったけど、なにがどこでファールしたのかよくわかんなかったからそれをちょっと調べてみたい。個人ファールとかチームファールとかがなんかに関係してんのかな。」

筆者：個人ファールとか、チームファールって言葉は知ってた？

E：知らなかった。

筆者：なんで今日それがあることがわかったの？

E：ファールしたときに、なんかアナウンスみたいなのが

流れてた。

というように、ファールというルールがあることを知り、調べてみたいという感想を持つようになった。

さらに、新たに生まれた疑問について、上手になるための方法や、選手がプレー中に何を考えているのかという記述ではなく、「どこからが2ポイントで、どこからが3ポイントか知りたい。コート of 広さを知りたい。ファールの種類を知りたい。」というように、バスケットボールという競技のルールについての記述があった。また、運動やスポーツが上達するための取り組みについては、「自主練をしたり動画で上手な人をお手本にしたりする。」と事後アンケートに記述した。練習するという本質は変わらないものの、上手な人を見るという考えが加わった。

②	あまりない
④	興味のあるスポーツが放送されていないから
⑤	練習する

表 5. 対象者 E 事前アンケート

3-1-6.対象者 F (山梨 QB 練習見学不参加者)

事後アンケートには、「応えんグッズを使って応えんができて、自分もチームの一員になれたみたいでもりあがった。」と応援についての感想があった。さらに、「ルールがよくわからなかったから、いまいち楽しめなかったところもあった。」と楽しめなかった理由を記述した。しかし、今後知りたいこととして、「バスケのルールがわかれば、この試合ももっと楽しめたと思ったので、もっとルールを理解したいと思った。」というように、楽しめるようにするための方法を記述していた。運動やスポーツが上達するための取り組みについては事後アンケートに「毎日練習することが必要だと思う。」と変化が見られなかった。

②	よくある
③	お父さんが観ているので一緒に観る
③-(1)	動画配信サービス
⑤	繰り返し練習する

表 6. 対象者 F 事前アンケート

3-2 考察

本研究における体験活動を通して、以上に述べたような結果が得られた。

まず、調査対象児童がチームワークや協力、励まし合いといった観点を捉えたことについては、バスケットボールという競技の特性と、対象者 C が感じたような山梨 QB が持つ雰囲気が影響していたと考えられる。それだけでなく、練習見学で選手と実際にふれ合う経験を通し、選手の生の声を直接聞くことができたことや、試合観戦で選手、指導者、関係者、応援団といった様々な立場の人々が関わり合っているのを見ることができたことが影響したとも考えられる。応援に目を向けた児童がいたことについては、試合観戦を会場で行ったことにより、会場の生の雰囲気を実感しつつ、スポーツに関わる人の存在を間近にみたことが要因であると考えられる。これにより、スポーツを「みること」を通して、スポーツとの多様な関わり方の一つである、「支えること」の体験につなげることができたと推察する。

また、試合観戦と練習見学では、それぞれ異なる成果が得られた。特に、対象者 D が「練習を見に行ったときは、試合にどのような人が関わっているかわからなかったけど、試合をみたら色々な人が関わっていることが分かった。」という感想を持つことができたことは、スポーツとの多様な関わり方という観点において大きな成果であると言える。今後は、児童の実態や、育成したい資質や能力に合わせて体験活動の内容を構成していくことで、より効果的な体験活動にしていけることができるであろう。

今後の課題として挙げられるのは、対象者 F の、「ルールがよくわからなかったから、いまいち楽しめなかったところもあった。」という感想にあるように、児童がスポーツ観戦を楽しめるようにする為の手立てを考える必要があることである。ルールが分からないこと、つまり、競技についての知識がないこ

とが楽しさや興味を引き出すことができない要因だと考えられる。VRでのスポーツ観戦ではあるものの、木原・萩原（2021）が行った研究の結果、観戦時の満足度は、そのスポーツの経験者は平常時より満足度が高くなったのに対し、未経験者は低下した。木原・萩原（2021）は、未経験者の満足度が低かった理由として、VRで得られる視覚情報の多さを挙げた。調査対象児童はバスケットボールの競技経験が少ない上に、現地観戦を行ったことで視覚に入る情報がテレビ中継よりも多かったことが、試合観戦を楽しめなかった要因になったとも考えられる。しかし、Fは「バスケのルールがわかれば、この試合ももっと楽しめたと思ったので、もっとルールを理解したいと思った。」という感想も同時にもつことができた。事前に競技について調べておくことや教わっておくことに加え、観戦を通して児童が疑問をもって調べていくことも意義があるであろう。

4.まとめ

本研究は、スポーツを「みること」を通じた体験活動が、児童のスポーツとの多様な関わり方に及ぼす影響を調査することで、その有効性を検討することを目的とした。本研究において、練習見学や試合観戦というスポーツを「みること」を通して、文部科学省、（2019）が意図している、「「すること」だけでなく「みること」、「支えること」、「知ること」など、自己の適性等に応じて、運動やスポーツとの多様な関わり方について考えること」に対象者全員がつながるような結果には至らなかった。しかし、対象者の体験活動前後における変化が示され、練習見学と試合観戦のそれぞれが児童に及ぼす影響を得ることができた。今後は、児童の豊かなスポーツライフの実現に向け、スポーツとの多様な関わり方について具体的に考えられるような取り組み方をより詳しく検討し、効果的な手立てを考えていく必要があるといえる。その過程で、スポーツとの多様な関わり方を実際に体験し、自分の適性に合ったスポーツとの関わり方を見つけていくことが重要であろう。

5.参考・引用文献

- ・木原沙織・萩原悟一（2021）スポーツ観戦におけるVR視聴時の客観的満足度に関する研究：競技経験の違いに着目して.運動とスポーツの科学, 27:1.
- ・国立青少年教育振興機構（2024）青少年の体験活動等に関する意識調査（令和4年度調査）報告書 <https://koueki.net/user/niye/110376019-1zentai.pdf>（参照日 2025年2月2日）.
- ・文部科学省（online）令和2年度青少年の体験活動に関する調査研究パンフレット（概要） https://www.mext.go.jp/content/20210908-mxt_chisui01-100003338_1.pdf（参照日 2025年1月16日）.
- ・文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説体育編，東洋館出版社:東京.
- ・文部科学省（online）体験活動の教育的意義 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm（参照日 2025年1月16日）.
- ・笹川スポーツ財団（online）子ども・青少年のスポーツライフ・データ 2019 https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/datalist/2019/（参照日 2024年12月6日）.
- ・武長理栄（online）青少年スポーツのする・みる・ささえるの実態と課題ーささえるに着目してー https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/column/20190913.html（参照日 2024年12月6日）.
- ・東京都教育委員会（2022）東京都オリンピック・パラリンピック教育:東京都オリンピック・パラリンピック教育ポスター.No.16_東京2020大会における子供の競技観戦 https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/content/files/activities_of_board_of_education/1.pdf（参照日 2024年10月16日）.